

# サービスラーニングプログラムを中心とした学びの展開に関する試行的研究 —海外サービスラーニングプログラム（カンボジア）の実践と科目との関連性—

## The Trial Study of Development Learning That Center on Service-Learning Program - Relativity of Practice of the Overseas Service-Learning and the Subject -

尾崎 慶太\*

Keita OZAKI

### 抄 録

大学教育において、学習目標の達成やジェネリックスキルを含んだ幅広い力を身に付けさせていくためには、サービスラーニングの手法を取り入れることが有効である。本稿では、本学で実施している海外サービスラーニング（カンボジア）の事例をもとに、学生の活動後の振り返りシートから、プログラムと科目との関連性について検討することを目的とする。

### 1. はじめに

近年新たな教育手法として注目を集めているサービスラーニング（以下、SL）は、学生の学力向上と市民教育に有効なものとして1990年代のアメリカの教育改革を背景に開発<sup>1</sup>された。SLは、体験と知を有機的に結びつけていくことで学生を能動的な学習者として立ち上げることができるとされている。

平成20年の中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（答申）では、①知識・理解、②汎用的技能、③態度・志向性、④総合的な学習経験と創造的思考力、といった4年間で身につけるべき具体的学士力を示している。本学では、「KUIS 学習ベンチマーク」を定め、①自律できる人間になる（知的好奇心、自己責任感、自律性）、②社会に貢献できる人間（順法/協調性、誠実性、社会的能動性）、③心豊かな世界市民（多様性理解、共感的態度、柔軟性）、④問題解決能力を身につける（情報収集/発見力、企画力、思考/判断力）、⑤コミュニケーション能力を身に付ける（プレゼンテーション/表現力、リーダーシップ/メンバーシップ、話す・聴く力/意見交換力）、の5つの大項目とそれらを達成するために求められる具体的な能力を明示し<sup>2</sup>、いわゆるジェネリックスキルを学習目標に取り入れる取り組みを進めてきた。

中央教育審議会が示した学士力4項目や本学の学習ベンチマークにあるジェネリックスキルの習得には、大学での講義に合わせて実際の社会体験を交えることが必要になると考える。大学教育に

---

\* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

SL を取り入れることで、科目で設定される学習目標の達成と具体的な思考能力や問題解決能力といったジェネリックスキルを養うことができるだろう。

しかし、従来から体験学習としての教育手法は取り入れられてきたにもかかわらず、なぜ SL に注目が集まっているのだろうか。それは、先にも述べた具体的な学習目標やジェネリックスキル獲得に合わせたプログラム展開やリフレクション（振り返り）が構造化されているからである。

そこで本研究では、海外 SL（カンボジア）の実践事例をもとに、実施上の課題を整理し、とりわけ教科目との関連性について着目し、大学教育プログラムとしてどのように位置付けていくかを検討することを目的とする。

## 2. 海外サービスラーニング（カンボジア）実践概要

まず、2009 年 8 月に実施した海外サービスラーニング（カンボジア）の具体的な取り組みについて整理する。このプログラムは学部学科問わず履修できる、「特別研究Ⅱ（海外サービスラーニング・カンボジア）」として科目設定（2 単位）を行った。ただし、2 年生以上を対象とした。なぜなら、全学共通で実施している「初年次サービスラーニング」<sup>3</sup>の上位プログラムとして位置付けており、重層的な構造を意図したプログラムとしているためである。

活動内容は、「カンボジアの貧困層における低学力の児童を支援するため、補習・教材の支援の実施」とし、具体的には、「①実践では市販の九九カードや計算ドリルを活用することで効果的な学習を支援していく、②使用教材を活動した小学校に寄贈するため、事前活動として教材購入資金の確保に向けた募金活動にも取り組んでいく」<sup>4</sup>とした。

なお、活動地域の選定及びコミュニティパートナーとの活動内容に関する調整は、事前にプログラム担当教員と本学サービスラーニング室コーディネーターが渡航し準備を進めておいた。

2009 年の履修者は 9 名であり、所属や学年はさまざまであった<sup>5</sup>。

### (1) 学習目標

この科目の学習目標を、「カンボジアの地域の課題（生活ニーズ）を発見し、グループで協力して解決する能力を身に付ける」とした。あわせて、KUIS 学習ベンチマークの中から、獲得をめざすジェネリックスキルについて、①多様性理解、②情報収集/発見力、③思考/判断力、④知的好奇心、の 4 点取り上げ、プログラムに則した具体的な内容をシラバスに明示した（表 1）。

（表 1）特別研究Ⅱ（海外サービスラーニング・カンボジア）シラバス上で設定した KUIS 学習ベンチマーク

大項目	中項目	内容
心豊かな世界 市民	多様性理解	サービスラーニング活動を通じて、カンボジアの地域特性に起因する課題を見出し、貧困家庭の子どもが抱える問題やその背景を理解することができる。さらに先進国（日本）の役割と自身の具体的な貢献活動の意義について学びを深めることができる。

問題解決能力 を身につける	情報収集/発 見力	サービスマーケティング活動に求められる事前学習・活動を行い、現地ではグループや地域の人々と協力して活動の問題点を発見し、分析することができる。
	思考/ 判断力	現地で発見した問題点や課題をグループで検討し、地域にとって効果的なサービス活動になるような改善策を提案・実行することができる。
自律できる人 間になる	知的好奇心	専門科目の学びを踏まえて、カンボジアにおけるサービスマーケティング活動に求められる新たな知識や技能の獲得に意欲的に取り組むことができる。

## (2) プログラム概要

(1) で示した学習目標及び学習ベンチマークの獲得に向けたプログラム構成は、事前学習・活動、現地活動、事後学習・活動の3部構成となっている。事前学習・活動では、1コマ90分の授業を計15回実施し、現地で活動する地域の状況や活動の目的の理解を深めるとともに、参加学生同士の意識の共有や動機付けの強化を図るための取り組みを行った。とりわけ、活動地域におけるプログラム立案や現地小学校における2週間分の指導案(算数)、授業で使用する教材の作成、カンボジア人交換留学生の協力によるクメール語での模擬授業、及び現地活動に必要な資金調達を目的とした募金活動を、学生達自身がスケジュールを立て役割を分担し進めていった。

期中活動は、2009年8月7日から25日までの期間実施した。活動内容は、活動地域の貧困層の特に学力に遅れが見られる子どもたちを対象に、算数教育(九九の指導)、給食支援、清掃活動を行うというものである。現地小学校の協力の下、夏休み期間中の小学校の教室を利用し、15名の子どもたちを学力別に2クラスに分けて実施した。また、主に午前中に小学校での活動を終え、午後からは宿舎に戻って、授業展開の振り返りを十分に行った。

事後学習・活動では、一連の活動に関する総括と考察、今後の課題抽出に取り組んだ。学内外に向けた活動報告のための資料作成や実際の報告会への参加、そして報告集の作成を行った。

## (3) 事前・期中・事後の3段階の振り返り

先にも述べたようにSLでは、振り返りが重要な構成要素とされている<sup>6</sup>。本事例においても、事前、期中、事後の各段階において振り返りシートを用いて、個別・グループで意図的な振り返りを実施した。

### ①事前学習・活動の振り返り

この段階では、「活動地域や対象に関する理解」と「活動に対する動機付けの確認と強化」を目的として行った。個人では、事前学習で用いた教材から得た活動先となる国や地域、現地の人々が抱える問題やその社会的背景、影響等を具体的に学び、そのことを実際の活動にどう結びつけていくのかといった項目を設定した。あわせて、事前活動全体を通した振り返りとして、活動に向けたレディネスの点検、活動ミッションの確認、大学における学び(教科や初年次SL)をどのように活動に結びつけていくのかについての振り返りを行った。

グループでは、上記の個人の振り返りを共有した上で、グループ内の自分の役割確認、事前活動

に対するグループの取り組み姿勢や期中活動への展望と課題について確認させた。

## ②期中活動の振り返り

期中活動の振り返りは現地小学校での活動期間中、毎日2時間程度実施した。

特にグループでは、活動中にビデオ撮影を行い、客観的に自らの活動を振り返ることを行った。そして、活動の結果と課題及び具体的改善策を検討させた。PDCAサイクルの必要性を理解させるために、日々の活動の振り返りにあわせて、活動開始から1週間後に設定した中間振り返り、活動に対する自己評価とまとめの観点を含んだ2週間後の最終の振り返りに取り組ませた。

個人では、一日の活動を終えた自己に対する振り返りを感情レベルで向き合わせた。さらに活動に対する自身の行動の客観化とそれら行動の意味や影響を考察させ、次に何ができるのかという項目を設定した。

## ③事後学習・活動の振り返り

事後の振り返りは帰国後に実施した。事前、期中活動を通した学びについて、大学の教科や初年次SLとの関連を考察させることで、今後の学習の必要性に気付けるような振り返り項目を設定した。各個人で取り組ませた後、グループで共有する時間を設けた。

## 3. 海外サービスマーケティング（カンボジア）の課題

以上、海外SL（カンボジア）の概要をみてきた。本プログラムでは、具体的な活動内容の提示や、貢献活動に対する明確な達成基準の共有化、プログラムの各段階に位置付けた構造的且つ重層的な振り返りの仕組み、あわせて活動を言語や文化、経済状況や社会的背景の異なる海外で展開したことにより、学生のジェネリックスキル獲得に何らかの効果があつたといえるだろう。

特に、本プログラムが単なる自分たちの思い出づくりにならないよう、事前活動・学習を通して、授業に参加した子ども全員の成績を150%以上向上させるというミッション（目標）をそれぞれ共有した。これを達成するために、学生は授業に参加する子ども達を成績別に2クラスに分け、各々担当するグループが責任を持って主体的にそのクラスに見合った授業計画を見直し、展開していった。また、授業中の子どもの様子を観察し、その子どもが意欲的に学べる教材を開発し指導へつなげる工夫をしていった。さらに、中間テストによって効果を測定し、最終テストに向けた計画を練り直すことで、結果的に当初掲げていた目標を達成することができた。これらPDCAサイクルを強く意識させる構造や内容は、問題解決型プログラムであり、学生にとっても問題解決能力を身につけることが可能になったのではないかと考える。

本プログラムは、学生のジェネリックスキル向上に効果的で、シラバスに明記した学習目標「カンボジアの地域の課題（生活ニーズ）を発見し、グループで協力して解決する能力を身に付ける」が達成可能なプログラムであるといえるが、課題も抱えている。

一点目は、幅広く学びを得ることが困難な状況に陥りやすいという点である。それは、問題解決

指向の強いプログラムの持つデメリットでもある。つまり、問題を解決することに傾注することで、貢献活動によって得られる効果は具体的且つ堅実なものである。しかし一方で、現場から得られるダイナミックな学びのメカニズムに乏しい。貢献活動の目標（成績の向上）が達成できないことがプログラムの失敗を意味するものとして、学生に認識させてしまうような構造であったことも否めない。貢献活動と学びのバランスに配慮した柔軟なプログラムづくりが必要であろう。

二点目は活動地域の問題である。つまり海外プログラムであることの難しさが存在する。プログラムからは、貢献活動に対する一定の成果を見ることはできたが、継続的な関わりではなく、一過性のものとして終わってしまっている。受け入れ側（現地小学校や子どもたち）にとって、日本人が来たという物珍しさやイベント的要素を拭えない状況にあることが指摘できよう。学生にとって達成感のある活動であったとしても、受け入れ側との協働がなければ、その地域に対する貢献活動を行ったとは言いがたい。今回の活動でも現地小学校の先生が学生の補習授業に関心を示したり、子どもの保護者が給食づくりに参加したりと地域住民のプログラム参画の兆しは見られたが、今後は地域住民と協働していくことを意識した仕組みづくりが求められるだろう。

三点目は体験と大学の学びの体系化である。このプログラムは全学科共通で2年生以上を対象としている。1年半（あるいは2年半）とは言え学生が習得してきたアカデミックスキルは各々の学科のカリキュラムによって異なり、上級学年ではなおさらである。それら学びの蓄積をSLプログラムにどうリンクし、体験を通して高め、さらなる学びの発展に向けて結びつけていくのかについての検討が必要である。プログラムからは、アカデミックスキルとの関連や深化が見えにくい。とくに、今後は大学における専門科目との関連性やジェネリックスキル獲得に向けた取り組みとの相互作用を視野に入れたプログラムを構成していく必要があると考えられる。

#### 4. 課題解決に向けて

先に述べた本プログラムの課題に関して、特に三点目の体験と大学の学びの体系化について、着目したい。そもそも、本プログラムの学習目標は、具体的な科目との関連を意図したものではなく、ジェネリックスキルの獲得を前提としていた。なぜなら、通常SLというのは具体的な科目の学習目標がありそれと貢献活動を結びつけるところにあり、その接続のために振り返りが必要となるが、本プログラムは貢献活動自体が先に存在していたため、具体的な科目の学習目標を明示することが困難な状況であったからである。また全学共通プログラムであったことから、どのような学生が参加するか未知数であったこともある。しかし活動期間中は、できるだけ科目との関連性を意識させるための振り返りシートを書かせることを行い、これまでの学びとの関連性やこれからの学びの具体化を促した。表2から表4は、異なる学科・学年の学生が記述した活動後（事後活動）の振り返りシートの抜粋である。

※表 2 教育福祉学科 2 年生の記述

今までの大学での学びとの関連性	
<p>&lt;教科&gt;</p> <p>保育内容や発達心理で、「子どもの名前を覚える。そして呼んであげる」ということを学びました。カンボジアの子どもは名前を呼びと喜んでくれて、そこから仲が深まったと思う。</p>	<p>&lt;初年次サービスマーケティング&gt;</p> <p>外国へ行く心構えができた。その国の文化を楽しむことができた。</p>
今後大学での様々な学習にどのようにつなげていくか	
<p>&lt;教科&gt;</p> <p>カンボジアだけでなく、ヨーロッパやアジアの様々な国へ行き、人々を見てその国ごとの価値観や生活を学びたいと思った。</p> <p>保育・教育について、人間という基本的なところから子どもと話ができると思う。</p>	<p>&lt;課外活動&gt;</p> <p>もう一度カンボジアに行って、ごみ山などのカンボジアの陰の部分を見たい。</p>

※表 3 人間心理学科 3 年生の記述

今までの大学での学びとの関連性	
<p>&lt;教科&gt;</p> <p>国際交流：世界にはたくさんの文化、国、言語があることを授業の中で知ることができた。そして、日本と違う文化、言語を実際に感じることができた。</p> <p>教職授業：国や文化が違って、教え方や指導、授業とは何かということの世界共通であることをカンボジアで授業をして確かめられた。</p>	<p>&lt;初年次サービスマーケティング&gt;</p> <p>異文化交流：韓国の大学生と交流し、カンボジアでも大学生と交流することで、若者は日本のことをどのように思っているのか、今流行しているものを聞くことで自分が持つイメージが変わり、イメージからリアルなものへと変わった。</p>
今後大学での様々な学習にどのようにつなげていくか	
<p>&lt;教科&gt;</p> <p>今回の活動でわかった自分の弱点は、指導力の低さだった。授業の中で一番何を伝えたいのか、子どもたちに何を伝えたいのかが自分でもよく理解できていない状況だった。今後、日本だから指導して伝わるような指導法を身に付けるのではなく、どこへ行ってもぶれることなく、自分の伝えたいものをしっかり指導し、伝えられる力を身に付けていきたい。</p>	<p>&lt;課外活動&gt;</p> <p>教育実習、ボランティア活動：今後、子どもたちと関わる中で少しでもカンボジアの文化や現状を伝えられるようにしたい。また中学（社会）の教員免許を取るので、教育実習などの時、カンボジアの歴史を教え、戦うことが何を生むのか、同じ人間で殺しあうことがどれだけ酷いことなのかを少しでも理解し、戦いはしてはいけないことだと思ってくれる子どもが一人でも多くなるように活動したい。</p>

※表4 ビジネス行動学科3年生の記述

今までの大学での学びとの関連性	
<p>&lt;教科&gt;</p> <p>大学の狭小の授業で、指導案の作成をしたことは今回の授業を組み立てていくにあたってとても活かすことができた。</p> <p>また授業の流れを考えるにあたって、大学での授業で模擬授業をしたことを役立てることができた。</p>	<p>&lt;初年次サービラーニング&gt;</p> <p>大学に入学してからすぐに行われた初年次サービラーニングでのグループの仲間と協力してプレゼンを考えるといったように、入学して間もない頃でまだ関わりももっていない人と協力し合えたことが、今回メンバーでも初めて会った人たちもいた中で活かすことができた。</p>
今後大学での様々な学習にどのようにつなげていくか	
<p>&lt;教科&gt;</p> <p>今回小学生の前に立って授業した経験を、秋学期から教職の授業に役立てたい。今回の活動で人に教えることを改めて楽しいと感じ、やりがいのある仕事だと思ったので、しっかり教員免許を取得できるように勉強していきたい。</p>	<p>&lt;課外活動&gt;</p> <p>今回、カンボジアの小学生と接したり、授業をした経験を生かして、ボランティア活動やスクールサポーターなども積極的に取り組んでいきたい。また、人の前で話すことを緊張してしまうので、プレゼンテーションなどにも積極的に取り組んでいきたい。語学の勉強（外国の方とのコミュニケーション）を深めたい。</p>

まずこれまでの学びとの関連性であるが、「教科」の共通点としては「子どもとの関わり」「指導方法」の視点がみられる。これは、参加学生のうち7名が教職課程を履修している（上記3名の学生すべて教職課程を履修している）ことからもうかがえることだが、学生自身の興味関心があることに向いていることが影響しているだろう。また、活動までに履修した科目内容（教職関連、児童関連）の応用として、現地の子どもたちと関わることができている点も見られる。

「初年次 SL」では、それぞれの学科で異なったプログラムを実施しているため、三者三様であった。2名は国際交流を経験してきたこと、1名はグループ活動で得た経験がこのプログラムで反映されていたことがわかる。本プログラムが初年次 SL の上位プログラムに位置づけられるといえるだろう。

つぎに、今後の学びへのつながりについてみていく。「教科」については、これまでの学びとの関連から、さらに「子どもとの関わり方」や「教職関連」を深めていきたいという記述がみられた。プログラムでの指導案作成や授業計画、現地での授業展開からの経験から、このような記述があったと考えられる。

「課外活動」では、よりカンボジアのことを知るための活動をしたい、経験を日本の子どもたちに伝えたい、ボランティア活動に積極的に取り組みたい、など授業以外の様々な活動への参加意欲が見て取れる。

以上のように活動後の振り返りシートから、これまでの具体的科目の学びを活動に活かし、また活動から学び得たことを次の学習へとつなげていく過程を学生自身が自覚している。これらのことを踏まえ、海外 SL（カンボジア）をどのようにしてカリキュラムに組み入れていくか、検討した

い。

SLプログラムのカリキュラムへの導入については、倉本（2008）が3つの概念をもとに整理しているが、特に転移学際的統合カリキュラムの概念がSLの発展におけるバックボーンとなっていること<sup>8</sup>から、海外SL（カンボジア）のプログラムをその概念に照らし合わせてみたい。この統合カリキュラムは、「学習テーマ・学習スキル・学習ストラテジー等が、学習者が帰属する現実世界・（生活背景）の意味・文脈と学習者の興味関心・主体的学習態度等と関連し、学習者がそれを自覚化・明確化することを基本的アプローチ」（倉本 2008：145）としている。つまり、学習中心のテーマのもと、各科目が融合した概念であることがいえる。海外SL（カンボジア）のプログラム内容や学生の記述、カンボジアの現状を踏まえると、図1のような概念図になるだろう。

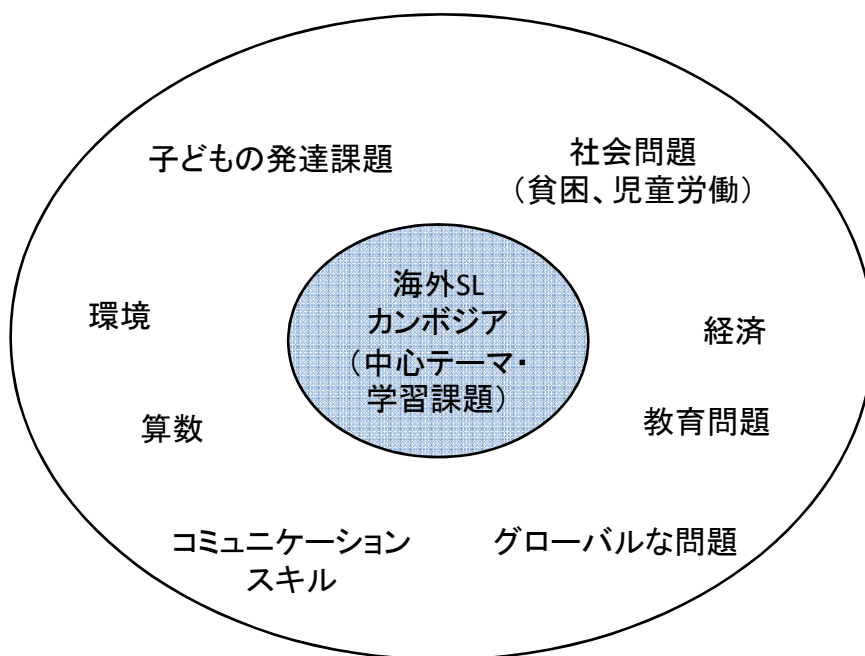


図1 海外SL（カンボジア）を中心としたカリキュラムの概念図

単独の科目の学習目標を達成するためのSLプログラムではなく、プログラムの中心テーマとそれを取り巻く現実社会に起こっている事象を融合させることが必要になってくると考える。さらに、それぞれの事象と関連のある科目のなかで、知識やスキルを学生に伝達させるのではなく、学生自らが統合させていくことが重要ではないだろうか。そのためのシステムの振り返りが必須であることは明白だろう。

## 5. おわりに

海外SL（カンボジア）プログラムを概観し、課題を整理してきた。そして、科目との関連性について概念図を示した。もちろん、単独科目の中での学習目標達成のためのSLプログラムも存在



するだろうが、この場合学生の主体性、テーマと学生の興味関心の合致といった部分が十分に担保できないという点もある。本プログラムでは、あらかじめテーマ設定（算数教育）を行ったが、統合プログラムという点からいえば参加学生の興味関心のテーマに結びつくような課題設定をすることで、より学生自らがテーマとそれを取り巻く事象とを有機的に結び付けていくことが可能になると考える。しかしそのようなプログラムを実施する場合、十分な実施体制の整備が必要だろう。現在、関西国際大学では共通の学習テーマを中心とした科目連携、LC（ラーニングコミュニティ）やTC（ティーチングコミュニティ）の構築などを推進している。このことは、SLプログラムをよりカリキュラムに組み入れることが可能となる仕組みづくりとあってよいだろう。学内におけるSLの更なる推進、発展していくためには、SLプログラムを中心テーマとしたカリキュラムや支援体制の改善が迫られているのではないだろうか。

---

#### 参考・引用文献

- 1 倉本哲男（2008）「アメリカにおけるカリキュラムマネジメントの研究ーサービ斯拉ーニング（Service-Learning）の視点から」ふくろう出版，128
- 2 KUIS 学習ベンチマーク <http://www.kuins.ac.jp/kuinsHP/about/target/benchmark.html>
- 3 <http://www.kuins.ac.jp/kuinsHP/extension/gp-sl/index.html>
- 4 「特別研究Ⅱ（海外サービ斯拉ーニング・カンボジア）」シラバスより参照。
- 5 教育福祉学科6名（4年生1名，3年生1名，2年生4名），人間心理学科1名（3年生），ビジネス行動学科2名（3年生）の計9名である。なお9名の内，7名が教員資格の取得をめざしている。
- 6 前掲書1，131
- 7 詳しくは，筆者の学会発表（尾崎慶太「ジェネリックスキルを高めるための大学教育プログラムの研究-海外サービ斯拉ーニングの事例から-」2009.11.29 日本福祉教育ボランティア学習学会），山本秀樹（2010）「ジェネリックスキルの獲得に向けた大学教育プログラムの研究-海外サービ斯拉ーニング（カンボジア）における実践から-」（関西国際大学研究紀要第11号）を参照されたい。特に，学生の振り返りシートをベースとして，ジェネリックスキルの向上とプログラム展開に関する課題・展望を述べている。
- 8 前掲書1 140-167

---

## Abstract

In higher education, service-learning method is very effective to achieve learning goal and deepen learning including generic skill. This paper aims to examine the relativity of the program and the subject from student write the reflection seat after activity, based on the practice of the overseas service learning program (Cambodia).